

学びの仕掛けとしての「読み聞かせの実践」

—小児科病棟におけるボランティア活動からのはじまり—

マユーあき、岩田英作
(文学科)

An Instance of Picture Book Reading to Children as an Aspect of the
Socio-linguistic Learning Process

— A Three-month Pilot Program in a Pediatric Ward and its Development —

Aki MAHIEU, Eisaku IWATA

キーワード：言語文化、解釈力と表現力、社会性

1. はじめに

島根県立島根女子短期大学文学科では、2006年度より新規科目「読み聞かせの実践」を開講した。近隣の子どもたちを対象に、学生が絵本の読み聞かせを行なう授業である。

それに先立ち、前年度には文学科の学生有志を募って、入院中の子どもたちに読み聞かせのボランティア活動を行なった。

本稿では、絵本の読み聞かせについて、ボランティア活動としてスタートし、そこから授業として本格的に取り組むようになった経緯、実践の内容と課題について報告する。

言語文化に関わる学びのひとつとして、参考になれば幸いである。

2. 松江市立病院小児科病棟における読み聞かせのボランティア活動（2005年度）

1) 読み聞かせを学生の学びの場に

筆者の一人マユーは、子どもの小学校入学を機に

保護者有志の図書ボランティアグループに入り、週に1回授業前のクラスに出向いて、絵本の読み聞かせをしている。読み聞かせは、子どもが小さいころから夜寝る前にやっていたことなので、その延長線と考えて始めたのである。

ボランティアに参加し、読み聞かせの聞き手が、わが子一人からクラス全員の子どもたちへと大きく広がると、聞き手の反応を教室全体の雰囲気として肌で感じられ、読み聞かせの楽しさと怖さを一層実感できるようになった。

おはなしの消化が自分の中で不十分なまま読んでしまうと、それが自身の読みにも聞き手の反応にも恐ろしいほど正直に現れる。読み手の気持ちがおはなしに添っていかないので、ただ文字を追って口先だけで読んでいるようになってしまうのだ。そうになると、おはなしは聞いている子どもたちの心まで届かず、ただことばだけが上滑りしているように感じられてしまう。

一方、場面の状況や登場人物の気持ちに対する具

体的なイメージを自分なりに持って読むと、おはなしは不思議にも立体的に立ちあがってくる。聞いている子ども達をすっぽりその中に包み込んでくれる。と同時に、読み手の側でもおはなしが体の中に入っていく、自分の体と心でことばを一つ一つ確かめながら、子どもたちに語っているような感じがするのである。おはなしの持つ力によって、読み手と聞き手が一つに繋がっていることを実感できる瞬間である。

こうして小学校での活動を重ねるうちに、読み聞かせとはただ子どもに本を読んで聞かせるだけのものではなく、子どもと大人がおはなしの世界を共有し、ともに楽しむ営みであるということ、そしてその共有体験こそが両者の心を繋いで充たし、ある種の幸福感をもたらす得ることを、みずからの実感に裏付けられながら改めて気づくことになった。

ここから、学生たちと共に読み聞かせの活動をやってみたいという思いに至るには、そう時間はかからなかった。が、この時点ではいつか実現できたら、というまだ漠然とした願望にすぎなかった。そんな思いつきの願望に現実性を持って考えるきっかけを与えてくれたのが、学科再編で新たに誕生する総合文化学科のカリキュラム作りであった。そこでは、既成の枠を超えて、新たに魅力ある科目を設けることが求められていた。振り返ってみれば、従来の文学科の授業といえば、ごく一部の科目を除き、もっぱら座学が中心であった。人と人を繋ぐことばの力を理屈だけではなく、実践による体験を通して学ぶ。絵本とじっくり向き合い、ことばの持つ力を感じイメージを膨らませ、それを豊かに生き生きと表現して子どもたちに伝える。読み聞かせという活動を、新たなことばに関わる実践的・体験的学びの場として教育に活かすことができるのではないだろうか。

そこで、同じ文学科の教員である岩田に相談を持ちかけた。岩田は「児童文学」の担当者であり、2000年度より「宮沢賢治劇場」を指導してきている。「宮沢賢治劇場」とは、学生たちが賢治の童話作品を人形劇やブラックシアターなどにして、地域の子どもたちを招いて観てもらおうイベントである。脚本作りから始まって、大道具・小道具などすべて学生たち

の手作りで行なわれている。このような学生の学びのあり方を実践してきた岩田は、今回の思いつきを相談するのにふさわしい同僚と思われた。

話しをしていくうちに、われわれは学生を教育していく上での課題を、同じ文学科の教員として共有していることが確認された。その課題とは、学生のことばに対する感受性と表現力をもっと豊かに養っていくこと、そして、もっと幅広い人とのつき合いを通して、社会性やコミュニケーション能力を身につけさせること、の二つである。学外での読み聞かせ活動は、実践とそこに至るまでのプロセスを通して、これらの二つの課題を学生が体験的に学んでいくことができる仕掛けになるかもしれない。「やってみよう。」話しは前向きにまとまった。

しかし、まったくゼロからの状態でいきなり授業として立ち上げるには、さすがに無理がある。まずは、課外活動として実験的にやってみようということになった。そこである程度経験を積み上げ、それを土台にして正式な授業としての形を考えていくという手順を取ることにしたのである。

2) 学外の実践の場

われわれが、課外活動としての学生による読み聞かせの受け入れ協力を依頼したのは、当時、本短大キャンパスの近隣に新病院を建築中の松江市立病院であった。

松江市立病院に協力をお願いしようと考えたのは、病気で入院治療中の子どもに対しても、読み聞かせのような活動は行われているのであろうか、という素朴な疑問を持ったことに始まる。読み聞かせやストーリーテリングが全国的にも盛んになってきている現在、松江市においても公立図書館を始め、保育園や幼稚園、小学校では、すでにボランティアを中心にこのような活動が定期・不定期いずれかの形で行なわれていると聞く。そのような状況の中で、病気で入院中の子どもたちに対してもこのような活動の手は届いているのであろうか、と思いついたのだ。入院中の子どもは、治療からくるストレスはもちろん、友達と遊びたい盛りなのに遊べない。何かと制約の多い入院生活をしている子どもたちにこそ、学

生たちが定期的に読み聞かせに訪問したら、きっと喜んでもらえるのではないだろうか。学生が読むおはなしに浸って、子どもたちにひと時病気を忘れ、おはなしの世界で自由に心の羽を伸ばして楽しんでもらえれば、という少々ロマンチックな願いもあった。

また、新病院が本学の目と鼻の先に在ることも、この活動にとって一つの魅力であった。毎日授業のある学生がこの活動に参加する場合、それはおもに授業前後の空き時間を利用してのことになる。活動を継続的に行なうために、キャンパスとの行き来が容易であることは、実践の場を考える上で外せない条件と思われた。

こうして、平成 17 年 3 月 7 日、松江市立病院を訪れ、小児科病棟で入院治療中の子どもたちを対象とした学生による読み聞かせボランティアを申し出、その受け入れ協力をお願いした。病人の治療が第一の目的である病院において、医学・看護の専門でもない学生たちが出入りすることを受け入れてもらえるものか、正直言ってあまり自信はなかった。また、最近個人情報保護法との関係で、外部の人間の出入りに対して病院側が相当慎重になっていることも予想された。しかし、われわれの様ざまな懸念に反し、田中雄二小児科部長はこの活動に積極的な理解を示され、即座に快諾してくださった。絵本の読み聞かせは、看護学校の学生さんが実習時に時々されることがあるようだが、ある一定期間における継続的な活動としてはなされていないとのことだった。われわれの活動が入り込む余地が、幸運にも残されていたのである。同席された事務局の方も、必要な事務手続きがきちとなされれば、活動の受け入れに問題はないとの判断だった。

こうして、松江市立病院が平成 17 年 8 月に新病院へ移転し、院内が落ち着いた秋ごろを活動開始の目標とすることにし、われわれはそれに合わせて学内的に準備を進めることになった。ところが、大学組織の大きな転換を控え、それに関連した業務に追われてしまい、実際にわれわれが学内での準備に取りかかったのは、11 月に入ってからのことであった。

3) 活動のための準備

①学生募集

まず、活動に参加してくれる学生の募集から始めた。ポスターでの呼びかけに応じ、文学科の 1、2 年生 21 名が集まってくれた。そのほとんど全員が、子どもへの読み聞かせの未経験者である。

その後、卒業研究として、入院中の子どもがより良い入院生活を送れるための遊びの研究に取り組む保育科の 2 年生 3 名がこの活動に加わることになり、参加学生は、合計 24 名となった。

②読み聞かせの練習

それぞれ自分の好きな絵本を持ってきて、一人ずつ全員の前で読み聞かせをする練習会を行なった。聞き手役の学生には、読み手一人ひとりにコメントを書いてもらい、後で各自が自分の読みを振り返る際の手がかりとした。この練習会での学生の読みは、まだまだ鍛える余地十分で、予想通り、子どもに読み聞かせることに対する認識の甘さがあらわになった感がある。しかし、読み手と聞き手の両方の役を経験することを通して、絵本の持ち方やページのめくり方に始まり、読む早さ、声の大きさ、地の文と会話文の読み分け、間の取り方など、読み聞かせをする際にどんな点に気を配らなければいけないのか、学生たちはだんだんと気がついていったように思う。この読み聞かせの練習は、病院での活動が始まってからは、病院を訪問する前に、担当学生（2～3 名）を集めて個別指導という形で行なった。

③病院見学

活動を始めるにあたって、実際どんなところで、どのような手順を踏んで読み聞かせの活動をするのか、学生自身が現場を見て理解しておくことが必要と考え、12 月始めの土曜日、松江市立病院の見学を行なった。当日は、田中小児科部長自らの案内で、読み聞かせの実践の場となる小児科病棟内のプレイルーム、それから院内学級の教室を見学させていただいた。また、病気の子供達に接する際にどんな点に注意したらいいのか、直接学生たちにお話しいただいた。この見学は、病院という一つの実社会の場で自分たちが活動するという自覚と責任感を学生に持たせる上で、よいきっかけにもなった。

④事務手続き

本活動を開始するにあたって、病院という場所ゆえに必要な事務手続きがあった。参加学生の健康診断結果の提出である。おもに結核などの感染症が院内に持ち込まれ、感染が広がることを予防するためである。このことについて病院事務局から通知を受けたのが12月の病院見学直後のことで、当初12月前半での活動開始の予定は、最終的に年末までずれ込むことになった。

4) 活動の形態と内容

田中小児科部長との相談の結果、1回の活動を2時間の時間枠で行なうこととした。相手は病気で入院中の子どもたちである。休んでいるときもあれば、ぐずっている時もある。担当の学生がプレイルームで待機し、子どもの病気や機嫌の状態を田中小児科部長が判断し、適当な子どもを学生に引き合わせて頂くには、それなりの時間の余裕を持って臨んだほうがよいと考えたのである。

また、絵本の読み聞かせをするといっても、お互い初対面の子どもと学生である。特に子どもには、読み聞かせ以前に、おもちゃを介しての遊びも交えながら学生に慣れ、その時間を共に過ごす相手として受け入れてもらうプロセスが不可欠である。そうして築かれた心のつながりの土台があってこそその読み聞かせでもある。この点から考えても、活動時間にゆとりは必要であった。

こうして、田中小児科部長から、以下のような病院として対応可能な曜日と時間帯が提示された。

火曜日	10:00~12:00
	15:00~17:00
水曜日	15:00~17:00
木曜日	10:00~12:00
金曜日	15:00~17:00
土曜日	10:00~12:00
	15:00~17:00
日曜日	10:00~12:00
	15:00~17:00

われわれはこれを受けて、活動のあり方の基本を次のように学生に提案した。

- ・2人ないし3人で1つのグループを作り、各グループが1週間ずつ担当する
- ・その期間内で2回以上は訪問する

訪問回数2回という基準は、少なく聞こえるかもしれない。しかし、通常の授業期間内での課外活動であることを考えると、妥当な線ではないだろうか。

病院での活動を終えた学生グループには、【資料1】の「活動記録ノート」に活動内容を記録して、提出することを求めた。この「活動記録ノート」は、活動の記録を蓄積することを始め、教員が担当グループの活動の内容と実態を把握すること、および、この記録から実際の病院での様子について後続のグループに情報を提供し、持って行く絵本の選択など活動に向けての準備に役立ててもらふこと、の3つがおもな目的である。

松江市立病院での事務決済が12月22日に下り、これを受けて歳も押し迫った12月28日、保育科の学生3名から本活動はようやく動き出した。この学生たちは前述の通り、卒業研究の一環として参加しており、冬休みを中心にできるだけ回数多く活動し、研究資料とすることを希望していたのである。このグループの活動初日には、岩田と保育科の卒業研究指導教員の栗谷が同行し、あくまでも黒子として活動の実際を見学した。

保育科の学生たちは、さすがに子どもを相手にすることによく慣れており、順調に本活動のスタートを切ってくれた。相手の子どもの様子がよく見えていて、臨機応変に対応できたことが6回分の活動記録ノートから窺える。活動の対象となった子供の年齢は、1歳未満~4歳であったが、大体は絵本の読み聞かせを遊びの中うまく取り込めたようだ。しかし、1歳前後の乳児の場合をあまり想定していなかったため、その年齢にふさわしい絵本とその読みの準備が十分ではなく、苦戦したことが活動記録ノートに記されていた。

さて、保育科の学生から文学科の学生に活動のバトンが渡される1月第3週を前にして、われわれはある不安を感じ始めていた。この不安は、病院での対象児の年齢が、考えていた以上に低かったことに起因する。文学科の学生が乳児や幼児を相手に、保

育科の学生のようにうまくコミュニケーションをとることができるだろうか。幼い子どもを前にして単純にかわいいと思う気持ちは当然抱くであろう。しかし、小さい子どもと触れ合う機会がない学生がほとんどである。どのように接していいものやらその場で戸惑ってしまうのではないか。

そこで、先発隊として活動を終えた保育科の学生に、自分たちの活動実態を報告してもらい、これから活動する文学科の学生に実践的なアドバイスをってもらう機会を設定した。彼女たちのアドバイスの中で特に強調されていたのは、次の事柄である。

- ・一緒に遊んであげることが中心で、その合間に読み聞かせをするイメージで臨んだほうが良い。
- ・遊びを通しての子どもとのコミュニケーションを大切にし、子どもの様子を見ながら読み聞かせをする。
- ・子どもによっては、興味関心が絵本に向かない子もいて、読み聞かせができないこともある。
- ・プレイルームでは保護者がつき添うことが多いが、子どもとうまく接していく上でも、保護者とのコミュニケーションは重要である。
- ・対象児は4歳ぐらいまでの子どもだったが、1～3歳までの小さい子どもたちが多かったので、絵本の選択に配慮する。

これらのアドバイスにより、それぞれの学生が頭の中で描いていた活動のイメージは、より現実に近いものに修正され、活動に向かう心構えができたのではないかと思われる。そのことを具体的に示していたのは、活動を前にした学生が読み聞かせの個別練習に持参する絵本であった。それまでは、どちらかという自分の好みに応じて絵本を選択することが多かったが、あくまでも読み聞かせをする子どもの目線で絵本を選んでくるようになったのである。

文学科の各グループの活動初日にのみ、岩田かマユーかどちらかが病院に同伴し、病院スタッフへの始めの挨拶から活動を終えての帰りの挨拶までの一連の流れを確認させた。その際、あるグループでは、子どもも学生もお互いに遠慮しすぎて、コミュニケーション回路を作り出せずに少々もじもじする場面が見られ、見かねた教員が橋渡しをすることが一度

ほどあった。しかし、そのグループの学生たちも二度目からは自分たちの力で子どもとの関係作りをすることに成功し、子どもの相手をするに少し自信ができたという活動記録に記している。活動が始まる前に心配した文学科の学生たちであったが、実際に始めてみるとその心配も特に必要なかったことを、学生たち自身が身をもって示してくれたと思う。

入院している子どもたちに絵本の読み聞かせを、と始めた活動であったが、実際には対象となる子ども



松江市立病院での読み聞かせの様子

ものの年齢が想像していた以上に低く、読みの練習をして出かけたものの、読み聞かせにはいたらなかったグループもあった。

また、訪問してみたら、対象となる子どもがあいにくくないということも何度かあった。しかし、そんな時は、田中小児科部長が学生たちを新生児室に連れて行き、生まれて間もない赤ちゃんを見せてくださったり、また、分娩室見学をさせていただいたりして、学生たちは大変喜んでいて。彼女たちにとって得難い経験となったに違いない。

翌年の2006年5月11日、松江市立病院ではナイチンゲールの生誕を記念する「看護の日」の催しがあった。その際、この読み聞かせボランティア活動に参加した当時文学科1年生の2名が一日看護局長に選ばれ、院内巡回をして入院患者の方々と交流を持った。看護局長を務めた学生たちも感激一入で、ボランティアがきっかけとなって思いもよらぬ貴重な経験をさせていただいた。

3. 「読み聞かせの実践」(2006年度)

1) 概要

「読み聞かせの実践」は、文学科の1年生を対象とした専門科目(選択)である。文学科には、国文・英文の2専攻があるが、いずれの学生も本科目を受講できる。マユー、岩田の文学科専任教員2名で担当し、開設の時期は1年前期、演習扱いで1単位と

した。初年度の 2006 年度は、国文 19 名、英文 15 名の計 34 名が履修した。

さて、本科目の教育目標は次の 3 点である。

「読み聞かせの実践」教育目標

- ①絵本とじっくり向き合い、絵本の解釈を読み聞かせに生かしながら、豊かに表現する力を養う。
- ②学外での活動で子どもをはじめ様々な人と関わることを通して、一人の市民として立ち振る舞う自覚をもち、社会性とコミュニケーション能力の向上を図る。
- ③地域の子どもたちに豊かな感性と想像力を養う文化環境の場を提供する。

①は学生と絵本の関わり、②は学生と人々との関わり、③は子どもと絵本の関わりに焦点を当てて設定した目標である。

文学科で何を学ぶのか、その中心にはもちろん言語がある。本科目は学生が学外に出かけていく実践形式の授業であるが、ことばを大切にする姿勢は保ちたいと考えた。そのことに関わって、われわれ担当者は次の 2 つの事柄に留意した。ひとつには、教育目標の①にあるように、絵本の解釈力の養成である。絵本のことばを大切にすると言い換えてもよい。子どもに読み聞かせをする前に、まずは学生みずからその絵本をよく味わい、そこに描かれたことばと絵の関わりを理解し、その絵本の魅力やテーマを考えてほしいと考えた。もちろんこのことは読み聞かせ（表現）と表裏一体であり、ゆたかな読み聞かせを行なうには不可欠である。さてもうひとつは、教育目標の②にあるように、人々とのコミュニケーションを、つまりはことばを大切にすることである。読み聞かせを通して、学生は子どもと触れ合う。親と触れ合う。活動の場を提供していただいた方々と触れ合う。そこでは、「こんにちは」「よろしくお願ひします」に始まって、様々なことばのやりとりが生じてくる。その際の態度も含めて、ことばが人間関係の基本となることを、この実践を通して体得してほしかった。

本科目の実践の場は以下の通りである。

実践の場

- ・松江市立病院小児科病棟
- ・松江市子育て支援センター
- ・松江市立幼保園のぎ

この 3 ヶ所で実践するに至った経緯をかいつまん

で述べておく。松江市立病院は本科目の成立以前から読み聞かせに協力していただいております、本科目においても当然継続の考えであった。しかしながら、病院の小児科病棟のみを実践の場とすることには不安もあった。前述の通り、小児科病棟においては入院している子どもの人数や年齢や病状などその時々によってまちまちであり、学生が病院に行っても読み聞かせを必ずしもできるわけではない。したがって、授業として実践を行なう場合には、ある程度の確かさで読み聞かせが成立する場をほかに設定する必要があると考えたのである。それが子育て支援センター内の遊戯室「あいあいルーム」である。そこには、人数の多少はあるにしても、ほぼ常時子どもの姿がある。ポスターやチラシで宣伝すれば、実践が空振りに終わることはないだろうと考えたのである。が、子育て支援センターにも気になる点があった。子どもの年齢である。本科目は月曜日の 2 コマ目 10 時 40 分から 12 時 10 分までの授業である。基本的に実践もこの時間帯で行なうつもりであった。平日の午前中に支援センターを利用する層は、幼稚園等に入る前の子どもたちが多く。あまりに子どもが小さくては、読み聞かせもままならないのではないか。この懸念は実際に実践を行なう段になってある程度あたっていた。授業（実践）の時間帯に、人数と年齢、その両者を満たしてくれる活動の場所はないものか。そこで浮上したのが幼保園のぎである。けれどもその考えに至るには相当の時間を要した。われわれが慌てて幼保園のぎにお願いに出かけたのは授業が始まってからはや一ヶ月を過ぎた頃のことである。幸い幼保園のぎではすぐに快諾を得ることができ、本科目での実践の場は 3 ヶ所に確定したのである。

実践にあたっては、もちろんそれなりの準備が要る。実践を始めたのが、松江市子育て支援センターでは 5 月 22 日より、幼保園のぎでは 6 月 5 日より、松江市立病院については、病院で活動するために必要な健康診断書の提出に手間取ったことや活動時間の確保が難しいことなどから、結局 7 月中旬からのおもに夏休みを利用しての活動となった。

2) 実践に向けた準備

①計画

本科目での実践は班単位で行なう。2006年度の場合、受講者34名を3～5名の9つの班に分けた。班分けに際しては、くじ引きによって決めた。国文、英文で固まったり、仲よし同士でくっついたりすることをやめて、この授業を通して新たな友をつくってほしいという気持ちがあった。

授業の進め方については、実践が始まるまでは全員が一緒に授業を受けることができたが、いざ実践が始まると、実践に出かける班と、待機組とに分かれる。基本的に、子育て支援センターと幼保園の各1班が実践を行ない、それぞれサポートに1班ずつつき、計4班が実践に出かけ、残りの5班が待機組となる。サポートの班は、実践の見学及びアンケートの回収などを行なう。さて、問題は待機組の時間をどのように利用するかであった。教員2名のうち1名は実践に付き添い、残る1名を待機組担当とし、待機組の授業は翌週に実践を行なう班の練習の時間にあてた。挨拶に始まり、できるだけ実際の実践に近いかたちで稽古を行ない、他の班は聞き役となる。

さて、実践に向けての学習内容は、大きく次の3点から成る。

学習内容

- ①絵本の選定と読み聞かせの練習
- ②子どもに向き合う心構えとマナーの修得
- ③歌や指遊びなど、読み聞かせに付随した活動の練習

①は、教育目標①に掲げた絵本の解釈力・表現力の養成に対応し、②は、教育目標②に掲げたマナーの修得に対応する。

さて、①の絵本の選定については、基本的には学生みずから絵本を選ぶこととした。しかしながら、各自がばらばらに絵本を選んで練習するよりも、最初は共通した絵本によって練習したほうが他者の読み聞かせと自分のそれとを比べやすいのではないかと、そういう考えで、とりあえず担当者のほうで以下の6冊を選んだ。選定に際しては、ことばが少なくても比較的単純なものからけっこう読み応えのあるものまで幅を持たせたつもりである。

- ・わかやま けん「しろくまちゃんのほっとけーき」(こぐま社)
- ・なかえ よしお作/上野紀子絵「ねずみくんのチョコッキ」(ポプラ社)
- ・マーガレット・ワイズ・ブラウン作/坪井郁美文/林明子絵「ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ」(ペンギン社)

- ・林明子「こんとあき」(福音館書店)
 - ・ウクライナ民話/うちだりさこ訳/エウゲーニー・M・ラチョフ絵「てぶくろ」(福音館書店)
 - ・北欧民話/せたていじ訳/マーシャ・ブラウン絵「三びきのやぎのがらがらどん」(福音館書店)
- 共通の絵本を実際の実践で利用する班もあったが、実践で扱った絵本の多くは学生たちみずから選んだものである。その一覧を【資料6】に掲げる。

絵本の選定に際しては、私物を利用する者、図書館を利用する者と様ざまであったが、本科目では、特に本学保育科所有の絵本を活用させていただいた。

本科目で用意した学生記入用のノート類は以下の通りである。

- ・作品解釈ノート【資料2】
- ・実践プラン【資料3】
- ・他の班の実践について【資料4】
- ・実践記録ノート【資料5】

「作品解釈ノート」は、各自が選んだ絵本の題名・作者・出版社に始まり、「あらすじ」「主な登場人物について」「各ページの持つ意味合い」「この作品で好きなところ」「この作品のどんなところを子どもが一番伝えたいか」の各項目について記入することとした。

「実践プラン」は、5分刻みで実践の内容と留意点を記入するようにした。一応40分まで目盛りをこしらえたが、子どもが読み聞かせを聞く持続力を考慮すれば、1回あたり30分程度を目安として組み立てるように指導した。

「他の班の実践について」の用紙は、実践及びその練習について、他の班の者が見学して書き込み、その班に提出し参考とするものである。しかし、実際には実践の見学ではほとんど利用されることがなく、待機組の練習の際にもっぱら利用された。

「実践記録ノート」はその名の通り実践の後に記入するものである。読み聞かせ及びそれ以外の歌や指遊び等の活動内容を具体的に記入し、合わせて事前の計画と実際との比較、子どもたちの反応、反省点などについても記録し、それに対して教員がコメントを加えるようになっている。

②実態

しかしながら、実際の授業はそう計画どおりには進まなかった。実践活動の実態については後述するとして、ここでは実践に向けての授業の実態について述べたい。

さきに待機組の時間の使い方について述べたが、迂闊なことにわれわれは4月当初になるまで待機組

の存在にすら気づかなかった。松江市立病院においてボランティアで読み聞かせをしていた段



学生を前に班で練習

階では、実践に誰がいつ行くのかを決めさえすればよく、待機組は存在しなかった。しかし、授業となると、実践に行く者以外はお休みというわけにはいかない。その違いに気がついた時には、すでに授業の開講は目前に迫っていたのである。

気づいたのがそれくらいだから、待機組が行なう授業の内容について事前に十分に検討できていたわけではない。実際には、授業も始まりガイダンスをしたり班分けを行ったりすると並行して待機組の計画を立てていった。先に示した学生記入のノート類もその過程で作ったものである。

共通の絵本で練習を行なうという計画も、結果的にうまく機能しなかった。理由は明らかで、時間の確保がほとんどできなかったためである。

実際、この授業を始めて最も悩まされたのは、正規の授業時間だけではまったく時間が足りないことだった。

正規の授業時間では、待機組のうち翌週実践の本番を迎える班が模擬練習を行なう。それを他の班が見て、感想・評価を模擬練習班に渡し、参考とする

のである。もちろん、教員のうち1名もその場にいるから、適宜指導を行なう。しかし、それであとはその班に任せっきりで本番突入というわけにはいかなかった。模擬練習時の達成度は、班によってまちまちである。中にはあとはお任せでも本番に臨めそうなレベルの班もあったが、多くの班は、まだまだ多くの課題を抱えた状態だった。模擬練習を終わった時点で、本番まで残されているのは1週間である。学生の側からも、あとは自分たちだけで練習を行なうことに不安の声が聞かれた。

われわれは、正規の授業時間以外に指導助言する時間を設ける必要に迫られた。短大生の時間割は、4大生の時間割に比べて過密である。放課後もアルバイトなどで集まるのが難しく、結局落ち着いたのは、昼休みの時間を利用しての指導であった。しかし、それでも時間が足りず、なんとか集まれる時間を捻出しながら練習を積み重ねていった。指導の形態も、教員2名で1つの班を指導したり、個別に学生と1対1で指導したりと、臨機応変に対応した。

こうして学生・教員共ども、予想をはるかに超えた時間を本科目に費やすこととなった。授業のある月曜日から始まって金曜日に至るまで、われわれ教員と受講生は、昼休みや空き時間にしょっちゅう顔を合わせて練習に取り組んだ。時にはそれでも足りずに休日の集合となった。それだけ密度の濃い授業となったが、正直なところ、われわれ教員も毎週本科目に振り回されていた感がある。事前に計画を立てていたはずのわれわれがそういうありさまであったから、まして大学に入学したばかりの受講生にとっては覚悟のしようもなく、青息吐息の日々だったはずである。ある班の学生が、それこそ土曜日の練習の折、この授業の単位が1単位なのは少ないと言い出した。授業が始まってまだ2ヶ月足らずの比較的早い時期のことだった。単位のことなど持ち出すとは情けない、この授業をとったのは子どもたちに読み聞かせをするためではなかったのか、というような言い方で、その時は学生の意見を封じてしまった。しかし、その学生は実感をそのまま正直に口にしたに過ぎないだろう。それを受け止めるだけのゆとりを教員が持っていなかったと、今になって思う。

3) 読み聞かせの実践

●松江市立病院小児科病棟における実践

松江市立病院小児科病棟では、学生2人で1組となり、基本的に2005年度の活動と同様、各組が1回2時間枠で活動を行なった。

前述の通り、活動を始めるにあたって必要な健康診断書の提出に時間がかかり、前期も終わりに近づいた7月中旬から9月末までの夏休みを中心とする活動となった。2ヶ月半の期間ではあったが、帰省する学生も多くいたため、実際の活動は帰省前の7月中旬から8月中旬、そして学生がまた帰省先から戻って来る9月中旬から月末に集中し、休みの中ほどに活動の空白ができる結果となってしまった。

対象となる入院中の子どもも季節柄少なかったようで、病棟を訪問したものの対象児がいなかったということもあった。しかし、2005年度の活動の時もそうであったように、このような場合、田中小児科部長が忙しい中、学生たちに病院内見学をさせていただき、新生児室で生後間もない赤ちゃんを見せていただいたり、分娩室の見学をさせていただいたことは、今回の学生たちにとっても貴重な経験となった。

読み聞かせには、子育て支援センターと幼保園の2カ所ですでに実践した後だったので、その経験を生かしながら取り組むことができた。小児科病棟ではその時その時で対象となる子どもの年齢が異なる。学生たちの活動記録によれば、必要に応じて時には用意した絵本をやめ、子どもに合わせて病院のプレイルームにある絵本をぶっつけ本番で読む、という柔軟な対応をすることもあったようだ。また、他の実践の場と異なり、学生と子どもの一対一、または一対二という親密さを感じることができる状況での読み聞かせだったので、学生は聞いている子どもの様子に十分注意を向ける余裕があった。それにより、子どもにじっくり絵を見せながら、子どもの方を見てゆっくり語りかける読みができたようだ。

一方、今回も子どもが小さかったり、絵本になかなか興味が向かないなどの理由で読み聞かせができないことも多々あった。そんな時、学生たちはおもちゃを使って子どもの遊び相手となって過ごすこと

になる。小さい子どもと触れ合う機会がほとんどない学生たちは、これはこれで新鮮な経験として肯定的に受けとめていた。

学生たち自身は、子どもとどのように接したらいいものやら始めは少し戸惑ったと活動記録に記している。が、活動後に田中小児科部長からは、今回の学生たちはみんな子どもとうまくつき合えていたという嬉しいコメントをいただいた。おそらく、病院での活動前に経験した2回の実践で、子どもと接する際の心構えのようなものが多少なりとも身についたのではないかと思われる。

小児科病棟での活動は、読み聞かせそのものはままならないことが多い。しかし、一緒に遊ぶことを通して小さい子どもとゆっくりじっくり向き合ってみる体験は、将来、学生が自分の子どもを持つ身になった時に生きてくるに違いない。いや、子どもを持つ、持たないに関わらず、この青春の一時期に、子どもという異なる世代に視野を広げてみるだけでも、十分に意義のあることではなかろうか。

●松江市子育て支援センターにおける実践

松江市子育て支援センターでは、5月下旬から7月下旬までの約2ヶ月間に、各班1回ずつ、計9回の実践を行なった。場所はセンター内の遊戯室である。場所については、当初独立した和室等が候補として上がったが、集客の問題などから、日常的に親子連れの方々が利用されている遊戯室に決まった。

遊戯室の広さは、学校の一般的な教室の2倍くらいは優にある。その一隅に陣取って、学生たちは、およそ30分間の読み聞かせの時間を持つのである。

遊戯室には、このたびの実践の案内を掲示させていただいた。しかし、利用者に周知されているわけではもちろんない。黙っていても、誰も学生の前に集まってきてはくれない。そこで、学生が利用者の方々に呼びかけることも時にはあったが、多くはセンターの職員の方から「お姉さんたちが絵本を読んでもくれますよ」という具合に呼びかけていただいた。

さて、子どもや親御さんを前にいざ始めようとする時、ごく最初の時期は「今から絵本の読み聞かせをします」ということばでスタートしていた。が、

これではいかにも堅苦しい。この実践を紹介する際に、もっとやわらかくて、聞いて楽しい呼び名はないものか。そこで思いついたのが、「おはなしレストラン」という名前だった。宮沢賢治は童話集「注文の多い料理店」の序において、童話のことを「すきとおったほんとうのたべもの」と言った。そのあたりのことを隠し味にこの名は出来上がった。そこでわれわれ教員は、学生にまずこの名を紹介し、支援センターをはじめとする今回の実践では、今後、「おはなしレストラン、はじまるよ」でいこう、ということになった。特に支援センターにおいては、持ち運びのできる看板に、「おはなしレストラン」と題し、「本日のメニュー」として読み聞かせをする絵本の題名を並べて、学生の傍らに立てかけることにした。この授業がいかにか手探りで進んでいったか、その一端がこういうところにも垣間見られる。

支援センターでの実践について、一言で言えば、それは学生たちにとって大きな試練の場であった。

前にも触れたが、支援センターの遊戯室の利用者、ことに平日の利用者は子どもの年齢が3歳に満たない人も多い。そういう子どももいることを念頭に置いて絵本を選び、つなぎの遊びを組み立てることは容易なことではなかった。本番の1週間前に模擬実践を行なうのだが、絵本の内容や長さが支援センターに合わないかと判断した場合、その場で急遽絵本の変更を指示することもあった。

「おはなしレストラン」を開店して、読み聞かせを行なっているあいだ、学生の前には遊戯室にいる方全員が集まっているわけではない。無論強制はできないから、興味のある方だけがお集まりになるのである。また、育児相談など、ほかの催しが同時刻に遊戯室で行なわれている場合もあった。読み聞かせを聞いている親子づれが何組かいて、そのほかあちらこちらに読み聞かせとは関係なく遊んだり話したりしている方々、というのが支援センターでの毎度の風景だった。小さな子どもに遠慮はない。読み聞かせをしている学生の横を、カタカタと音の鳴る木馬が通り過ぎたりする。最初は絵本に見入っていた子どもでも、飽きれば学生に背を向けてほかの遊びを始める。学生の感想には、読み聞かせをしてい

るあいだに、子どもがひとり、ふたりと減っていく、その寂しさをうったえるものが多かった。中には、最後の読み聞かせの時には、子どもがとうとうひとりになったというケースもあった。

こういう雰囲気の中で絵本に集中することは、読み手・聞き手双方ともに難しい面があったのは確かである。班編成は4人の班が多かったが、4つの絵本の読み聞かせを聞くことは、途中で遊びを挟みながらとはいえ、小さな子どもにはいささか荷が重かったかも知れない。

しかしながら、そういう困難さがあった一方で、支援センターで実践を終えた学生の感想からは、「うまくいかなかったこともありましたが、短大での練習と違い、絵本を読んでいるとき、子どもたちがい



ろいろな反応を返してくれるのでとても嬉しかった」、「本を読んでいる時、子どもの様子を見

ると本に釘付けになったかのように集中して聞いてくれてすごく嬉しかった」、「最後に子どもが寄ってきて『もう1回読んで』と言ってくれた時にはこの授業をやっていてよかったなと本当に思った」など、ある達成感もうかがうことができた。

小さな子どもに遠慮はないと書いたが、それはマイナスの意味に限らない。絵本やつなぎの遊びが面白ければ、子どもは目を輝かせて反応する。学生たちにとっては、それが驚きでもあり、救いでもあったようである。

●松江市立幼保園のぎにおける実践

松江市立幼保園のぎでは、6月初旬から7月中旬にかけて、日数にして6日、幼保園のクラスの数にして16クラスで実践を行なった。当初の計画では、7月24日を幼保園の最終日とし、総仕上げの意味を込めて受講生の大半で出向いて10クラスにわたって実践を行なうつもりだった。ところが、松江は折

しも記録的な豪雨に見舞われ、幼保園もその災禍に遭い、残念ながら最終の実践は実現しなかった。

先述した通り、幼保園のぎでの実践については、こちらの急な申し出にも関わらず快諾していただき、その上、実践のスケジュールを用意していただいた。病院と支援センターにおける実践では、読み聞かせの対象の年齢や人数をあらかじめ知ることは困難である。しかし、幼保園の実践では、スケジュールを用意していただいたおかげで、学生は自分たちの班が何歳の子どもを対象に実践するのかを承知して臨むことができ、絵本の選定や遊びの準備もしやすかった。

また、9つの班のうち6つの班は、幼保園の前に支援センターでの実践をすでに経験していた。両者



幼保園のぎでの実践の様子

の環境は異なる点が多いが、子どもに向けて絵本を読むことに変わりはない。経験済みの6班に

ついては、感想にも「2回目の読み聞かせで絵本を読むことの恥ずかしさとかの抵抗もあまりなかった」とあるように、比較的ゆとりを持って臨むことのできた学生が多かったようである。

さらにもう一つ、幼保園が他と大きく異なる点があった。担任の先生の存在である。1クラスの園児はおおよそ20名前後、その子らを前に学生は実践を行なうわけだが、園児の背後、あるいは横のほうに、クラス担任の先生が必ずついておられる。学生の感想には、「保育士の先生も一緒にいてくださったおかげでほぼ実践どおりに出来た」、「担任の先生が所々フォローして下さったので、とてもやりやすかったし盛り上がった」、「担任の先生がかなりサポートしてくださって、子どもたちを盛り上げて下さったり、子どもたちから私たちに対しての質問タイムを作ってくださいかなり大きな手助けをいただきました」など、担任の先生方に感謝する声が多かった。

このように、幼保園での実践は、多くの学生が恵まれた条件のもとで行なうことができた。ところが、恵まれているがゆえの悩みも他方で生じた。感想に、「圧倒された」、「押しつぶされそう」などとあるように、学生の中には、大勢の子どもたちの反応のよさにかえって萎縮してしまった者もいた。が、大方の学生は、最初は圧倒されながらも、それを喜びと力にかえて、充実した読み聞かせの時間を持つことができたようである。「また来てね」の子どもの一言がうれしかったと、ある学生は書いていた。

4. おわりに

「前期の授業でいちばん大変な授業でした」。この授業を受講した学生の多くが、そう感想に書いていた。案の定、「1単位は少ない」という声も多く寄せられた。しかし、それにも増して多かったのが、やりがいがあったという満足の声だった。多少はわれわれ教員に対するリップ・サービスも含まれているかも知れないが、感想を読みながら、この授業をやってよかったとつくづく思う。

学生と同様に、われわれ教員も、この授業がこんなにしんどいとは夢にも思っていなかった。しかし、それでいて毎週が楽しく充実していたのもたしかなのである。学生と教員という言い方をするが、この授業では、その境界をどこかで越えていたような気がする。教える側と教わる側という関係ではなく、「読み聞かせの実践」を一緒に作り上げていった同志という印象が強い。この実践を通して、「学び」を仕掛けた当の教員がいちばん学ばせてもらったのかも知れない。

本学文学科は2007年度に再編され、総合文化学科として生まれ変わる。しかし、「読み聞かせの実践」はまだ始まったばかりである。このたびの反省点を踏まえ、言語文化に関わる教育の一環として、より一層の充実に努めたい。

最後になったが、実践の場を与えていただき、協力していただいた諸機関の皆様方には、心から感謝申し上げる次第である。